

の学会なども行われており、今後様々な形で医学研究、教育や医療に利用されると思われる。麻酔科領域でも、従来のネットワークの利用に加えて、WWW による研究成果の発表、電子出版、各種広報、医学データベースの公開等の情報発信を行う必要がある。

10) Trigeminal Neuropathy が疑われた症例

早津 恵子・富田美佐緒
陳 棠棣 (新潟大学麻酔科)

EB virus によると思われる Trigeminal Neuropathy の治療を経験した。

症例は57歳の女性で、特記すべき既往もなく、右側の顔面の原因となる器質的疾患もなかった。明瞭な trigger point もなく、Carbamazepin も無効であった。SGB により除痛をえることができた。病週2週より、EB virus 抗体価の上昇があった。

11) 脊損妊婦における硬膜外麻酔による分娩時管理の経験

富田美佐緒・早津 恵子 (新潟大学麻酔科)

脊損患者では、脊損部以下の刺激により、発作性高血圧、徐脈、顔面紅潮等を主症状とする autonomic hyperreflexia (以下 AH) が発生するとされており、分娩時の子宮収縮においても例外ではない。我々は、経膈分娩に際し硬膜外麻酔を行い、無事女兒を出産した第5胸髄脊損症例を経験した。子宮収縮により本症例の血圧は92/52から 128/72 mmHg に上昇、脈拍は92から64/分に減少し、頭がぼーっとするなどの不快感を訴えたが、ブピバカインとフェンタニルを硬膜外カテーテルより投与することで、子宮収縮時の収縮期血圧は100~110台に安定した。本症例のAH は比較的軽度であったが、硬膜外麻酔により AH とそれに伴う不快な症状を軽減できた。

12) 在宅硬膜外モルヒネ投与中の患者に生じた帯状疱疹

丸山 洋一・国分誠一郎 (県立がんセンター)
高橋 隆平 (新潟病院麻酔科)

症例は64才男性。腹腔内リンパ節原発の髄外性形質細胞腫にて当院内科にて化学療法を施行されたが効果少なく、腹痛のコントロールを当科に依頼された。当初硫酸

モルヒネ錠の増量を試みたが、嘔気・動悸の副作用強く、H6年12月6日よりエクセルフェューザーを用いた硬膜外モルヒネ開始 (Th 7/8, モルヒネ 10 mg/日)、経過良好にて在宅管理を継続していた。H7年4月10日、右 Th 4 領域に帯状疱疹発症、同12日当科受診時に同部位に特有の皮疹とかゆみを訴えていたため、硬膜外モルヒネの継続とともにアシクロビル錠投与。経過は非常に良好で、疼痛は全く感じることなく皮疹も軽症のまま完治した。以上の経過より、帯状疱疹に対し早期よりモルヒネを含めた硬膜外ブロックを施行することは有意義と考えられた。

13) Mild hypothermia を用いた蘇生後低酸素脳症に対する脳保護法の施行経験

渡辺 逸平・佐藤 一範 (新潟大学附属病院)
集中治療部
吉川 恵次 (同 救急部)

CPCR 後の脳低酸素症に対し低体温療法を施行し有効であったと考えられた症例を経験した。症例は46歳の男性。硬膜外ブロック施行後、心肺停止状態で発見された。ただちに CPCR 施行され、心拍再開、自発呼吸も出現したが意識レベルは300のままであった。ICU 収容後、全身性の強直性痙攣へ移行、低酸素脳症を疑い、バルビタール療法と NLA 麻酔下の軽度低体温法を併用した。冷却は4日間、バルビタール療法は一週間施行した。その後は順調に回復した。低体温療法施行中、K と血小板が著明に減少したため、それぞれ補充を必要としたが、本療法に起因する他の合併症は認めなかった。

14) てんかんを発症機転とする窒息症例

—本院救急外来統計からの考察を含めて—

本多 忠幸 (新潟市民病院)
救命救急センター
河野 達郎・渋江智栄子
永田 幸路・遠藤 裕 (同 麻酔科)

癲癇発作を発症機転とする窒息症例患者の治療経験をえた。発作が食事中に起き、かなりの食物残渣により気管や左右気管支が閉塞し、何度も呼吸停止を来した。5時間におよぶ気管支ファイバーの操作により異物を除去、救命した。本院救急外来受診患者の中で、癲癇を診断名とする患者数は約0.7%くらいでその半分以上は小児で占められている。成人患者は、年間約20人が入院となるが、救急外来での癲癇患者の死亡者は3年間で1人であっ